

提言

新国
勇



につくに・いさむ 只見の自然に学ぶ会代表。県森林文化に係る調査検討委員。県生物多様性推進協議会委員。只見町職員として町史編さんや世界ブナ・サミットの開催、只見町ブナセンターの開設に携わった後、地域の自然を見直すことによるまちづくりを続けている。

世界中の生き物が急激に絶滅していくのに警鐘をならすため発表したのが最初である。それはレッドデータブックという本にまとめ

寸前だ。ヒヌマイトンボは太平洋岸河口のヨシ原でわずかに生息しているにすぎない。春の妖精といわれるギフトヨウもめったに会えない

モリの仲間ではもとも小さい。飛翔能力も低く、遠くへは移動できない。ブナ天然林の樹洞に生息しているため、

生き物がなぜ絶滅していくのか。人間の仕業のせいである。森林伐採、土地造成、水質汚染、乱獲などいくつもの要因が重なっている。

さまざまな生き物が日本中から姿を消していく中で、本県は広範囲で多様性に富む自然環境を有している。絶滅に瀕する生き物が増えたとはいえる。まだ絶滅危惧種が数多く生息することができる自然環境をもっているのがわが福島県だ。そのことを自覚し、もつと誇りを持つべきだと思っている。

絶滅危惧種の宝庫 誇りに

絶滅危惧種といふ言葉を耳にする機会が増えた。数が減つて珍しくなったものを絶滅危惧種呼ばわりする。

すこし変わつて似た仲間がいないような人を絶滅危惧種と表現することもある。

られた。日本では環境庁（当時）が91年に、福島県は2002年と03年にそれぞれの状況をとりまとめて刊行している。

蝶となつた。ゼニタナゴ、イトヨという限られた水環境に生息する魚も絶滅の危機にある。どこにでも見られたツチガエルですら数少ないカエルとなつた。里山をすみかとするサシバも急激に数を減らした。

その一方、本県は絶滅危惧種の宝庫といふ見方もできる。イスに本部をおく国際自然保护連合が、1966年、

20年ほど前なら、エビネやヒメサユリは県内でふつうに見られたが、いまや珍しい植物となつた。アツモリソウやクマガイソウに至つては絶滅

する。04年、クロホオヒゲコウモリが只見町の奥山で24匹も捕獲されたことがある。国内でも40匹ほどしか捕獲されていない希少なコウモリである。体重は5g前後と、コウモリの仲間ではもとも小さ

い。飛翔能力も低く、遠くへは移動できない。ブナ天然林の樹洞に生息しているため、

生き物がなぜ絶滅していくのか。人間の仕業のせいである。森林伐採、土地造成、水質汚染、乱獲などいくつもの要因が重なっている。

さまざまな生き物が日本中から姿を消していく中で、本県は広範囲で多様性に富む自然環境を有している。絶滅に瀕する生き物が増えたとはいえる。まだ絶滅危惧種が数多く生息することができる自然環境をもっているのがわが福島県だ。そのことを自覚し、もつと誇りを持つべきだと思っている。

また、イヌワシは1998年、日本イヌワシ研究会の調査によつて、奥会津地域に13

(次回は20日に掲載予定です)